第3章　第一次世界大戦後のドイツの平和運動

竹本真希子

はじめに

第一次世界大戦は国際政治のあり方を大きく変えたと言われるが、その影響を強く受けたのがドイツであることは言うまでもないだろう。敗戦国であるドイツは帝国から共和国へと体制を変えたが、大戦の講和のためのヴェルサイユ条約の戦争責任条項や賠償金問題は重荷となってその後の政治に影を残し、ナチによる独裁と第二次世界大戦への道に進むこととなる。しかしその一方で、第一次世界大戦中に戦争そのもののあり方が変わったことでドイツの戦争と平和に関する議論も大きく変化し、大戦後のヴァイマル共和国期には活発な平和に関する議論と平和運動が展開されてもいる。本稿ではこうした第一次世界大戦後の平和運動と平和論を中心に振り返り、ドイツの平和運動の歴史を追うこととしたい。

1　平和運動のはじまり―一九世紀末の平和運動

人間は古代から戦争と平和について関心を持ち、議論してきた。古代ギリシアの歴史家であるヘロドトスが主題としたのはペルシャ戦争であり、続くトゥキュディデスはペロポネソス戦争の歴史を書いた。喜劇作家のアリストファネスによる『女の平和』は、女性による反戦を描いたものであった。またエラスムスやグロティウスなど、中世から近代にかけても多くの思想家が戦争と平和の問題を取り上げている。そしてイマニュエル・カント（Immanuel Kant）の『永遠平和のために』は、現在に至るまで世界の平和思想に大きな影響を及ぼしている。しかしながら今日の我々がいうところの平和運動が本格的に始まったのはかなり時代が下ってからのことで、一九世紀になってからとされている。アメリカで平和協会がつくられたのを皮切りに、キリスト教の一派のクエーカーなどが中心となって欧米の各地に平和協会が設立されるようになった。

ドイツにおける平和運動のはじまりは、一八九二年のことである。アメリカや西ヨーロッパ諸国に比べ、やや遅れてのことであった。そもそもドイツでは他のヨーロッパ諸国に比べて国民国家建設が遅れていた。北部のプロイセンを中心に小ドイツ主義に基づ

いた国家建設が始められ、一八七〇年の普仏戦争に勝利した後、ドイツ帝国が成立し国民国家統一がなしとげられたのは、一八七一年のことである。ここから急激な近代化と富国強兵政策によりドイツは大国への道を歩み、帝国主義の時代における世界分割に参入していく。一九世紀末から二〇世紀初めにかけてのヨーロッパはドイツ・オーストリア＝ハンガリー帝国・イタリアの三国同盟とイギリス・フランス・ロシアによる三国協商とに別れていた。ドイツはベルリン、ビザンティウム（イスタンブル）、バクダードに鉄道を敷設しようとする3B政策によって、カイロ、ケープタウン、カルカッタを繋ぐイギリスの3C政策と対立し、さらに二度のモロッコ事件によってフランスとの関係も悪化させた。各国の軍拡競争と植民地政策はさらなる対立の火種を生み、一部の人々の間に欧州戦争勃発への危機感を抱かせることになった。そしてこれが平和のための「組織化」をもたらしたのである。一八九九年と一九〇七年に開催されたハーグ万国平和会議などの国際会議や、国際連盟運動などが起こったのはこの時期であり、まさにこれと時を同じくして各地に全国規模の平和団体が生まれ、同時に国際的な平和運動も始まったのである。

ドイツにおける平和運動は、オーストリアの影響のもとで始まった。一九世紀末のド

イツ語圏の平和運動を支えた一人であるベルタ・フォン・ズットナー（Bertha von Suttner）がそのために大きな役割を果たした。貴族の家に生まれながら貧しく、家庭教師や家政婦の仕事をしていた彼女は、一八八九年に出版した反戦小説『武器を捨てよ！』の成功によって反戦運動家として名を知られることとなり、オーストリアのみならずドイツやアメリカにも渡って平和を呼びかけた。アルフレッド・ノーベルの友人でもあり、彼女の進言によってノーベル平和賞が作られたとも言われている。ズットナーの人道主義的な平和主義と国際的な活動は、オーストリアの平和運動の原動力となり、一八九一年にオーストリア平和協会が設立された。そしてこれがドイツの活動に影響を与え、彼女の弟子であるアルフレート・ヘルマン・フリート（Alfred Hermann Fried）が中心となり、翌一八九二年、ベルリンにドイツ平和協会が設立されたのである。フリートはズットナーのやや感情的ともいえる反戦平和を「科学的平和主義」に発展させるべく、平和運動の理論的基盤として国際法を取り入れた。なおズットナーとフリートは平和運動への功績をたたえられ、それぞれ一九〇五年と一九一一年にノーベル平和賞を受賞している。

設立から第一次世界大戦前までのドイツ平和協会は、国際協調や法による平和を唱え、

仲裁裁判所や超国家組織の設立といった目標を掲げるものであった。政治家に軍縮を働きかけることで戦争を防ごうとする、自由主義者による「名士のクラブ」ともいうべきものだったと言われている。もともと「平和主義」（Pazifismus）という言葉は、このような運動を指す表現としてこの時期に作られた造語である。この時点では平和主義とは、国家間の紛争を平和的・非暴力的に解決しようという、個人的あるいは集団的な努力のことを指しており、これによって法に基づいた諸国民および諸国家共同体が建設されるべきだと考えられていた。そして平和主義者とは、こうした運動の担い手として自覚を持って活動する人々を意味する言葉であった。

こうした国際協調の運動とは別に、平和運動の発展に大きな影響を与えたのが、第二インターナショナルの反帝国主義反戦運動である。一九〇七年のシュトゥットガルト大会決議や一九一二年のバーゼル臨時大会での反戦活動はよく知られ、彼らが唱えた「戦争に対する戦争を」というスローガンは、その後今日に至るまで平和運動のスローガンのひとつとして知られるものとなっている。第一次世界大戦以前のドイツでは、自由主義者を中心としたドイツ平和協会と社会主義者の反戦運動はそれぞれ別の流れとして存在し、与することなく行われていた。

2　平和運動の発展と大衆化の試み―ヴァイマル共和国期の運動

（1）第一次世界大戦の影響

しかしこのように平和運動が始まったものの、戦争を防ぐには不十分であった。一九一四年六月のサラエヴォ事件が直接的なきっかけとなって、オーストリア＝ハンガリー帝国がセルビアに宣戦したことにより、第一次世界大戦が勃発した。ドイツは八月に参戦することとなった。皇帝ヴィルヘルム二世（Wilhelm II）は「余はもはやいかなる党派も知らぬ。ただドイツ人のみ」という言葉で国民の結束を訴え、ドイツは愛国主義的な「八月の高揚」のもと、戦争へと向かったのである。帝国主義に反対し反戦平和を訴えていたはずのドイツ社会民主党もこの時、戦時公債の発行を支持した。唯ひとりカール・リープクネヒト（Karl Liebknecht）だけがこれに反対したのであった。彼はのちに社会民主党を離れ、ローザ・ルクセンブルク（Rosa Luxemburg）とともに共産党を設立することになるのである。平和主義者の中には開戦後も引き続き反戦を訴えたものがあったが、平和運動は圧力を受け、彼らの活動は制限された。フリートなどはドイツを離れてスイスに亡命している。

第一次世界大戦は史上初の総力戦となり、「クリスマスまでに帰れる」と考えていた兵士たちは四年にわたる長い戦いを強いられることとなった。ドイツ軍は大戦初期こそ連合軍を圧倒するものの、戦線は長引き、とくに西部戦線での塹壕戦は膠着状態で終わった一九一六年のソンムの戦いをはじめとして、厳しいものとなった。戦争の長期化に加え、大戦中に毒ガスや飛行機などの兵器が大幅に「進歩」したことは、新たな戦争の時代の到来を痛感させた。そしてドイツの無制限潜水艦作戦を受けたアメリカの参戦や、大戦中におきたロシア革命、日本といった新興国の登場は、ヨーロッパの世界での地位を脅かし、人々に「西洋の没落」を意識させることとなった。

第一次世界大戦での敗北がドイツ社会にもたらした変化は、計り知れないものである。ドイツ敗戦の色が深くなると、キール軍港での蜂起をはじめとしてドイツ革命がおこり、共和国が宣言され、皇帝ヴィルヘルム二世はオランダへ亡命した。革命状態のベルリンを避けて議会がヴァイマルで開かれたために、この新しい共和国は通称として「ヴァイマル共和国」、社会民主党、民主党、中央党からなる新しい政権は「ヴァイマル連合」と呼ばれるようになった。ドイツはヴェルサイユ条約に調印し、連合国と講和を行ったが、ドイツに戦争責任があるとした第二三一条や天文学的な額の賠償金などの厳しい措置は、

結果としてドイツ国民の間に戦勝国への復讐心や調印した政治家たちへの憎悪を引き起こし、のちのヒトラーによるナチ独裁体制につながった。再軍備、オーストリア併合、チェコスロヴァキア解体などを経て、第二次世界大戦が勃発するのである。

(2) ドイツの軍国主義に抗して

総力戦の経験と共和国の成立は、ドイツ社会のみならず平和運動にも変化をもたらした。自由主義者を中心とした平和運動は社会主義者の運動と連携し、大衆運動化を進めることとなる。そしてそれに伴って「平和」の意味も変化していく。

ヴァイマル共和国の初期には、一時的にではあるが平和運動が昂揚した。第一次世界大戦以前からドイツ平和協会を支えていた歴史家で民主党の政治家であるルートヴィッヒ・クヴィッデ（Ludwig Quidde）らとともに、西部戦線で塹壕堀を経験したジャーナリスト、カール・フォン・オシエツキー（Carl von Ossietzky）や、オシエツキーと同じくジャーナリストであり、また作家としても知られていたクルト・トゥホルスキー（Kurt Tucholsky）のような若い世代の知識人が平和運動に加わった。第一次世界大戦以前のドイツ平和協会の活動に社会主義に近い層が加わることによって、平和運動は左

派の知識人を中心とした運動へと変化したのである。ドイツ平和協会のほかにも学生や女性のグループによってさまざまな平和団体が作られ、これらを束ねるものとしてドイツ平和カルテルも設立された。全国的なドイツ平和主義者会議も開催されている。

ヴァイマル共和国期の平和主義は、反軍国主義・反戦争崇拝を第一の特徴とする。とくにドイツの軍国主義に対する平和主義者の批判は厳しいものであった。第一次世界大戦については、敗戦後のドイツ社会のなかでも戦争責任を認めず、それが防衛戦争であったと認識するものも多かったが、平和主義者、とくに若い世代の人々にとっては、ドイツの根強い軍国主義こそが第一次世界大戦の原因であり、同時に現在の平和を妨げる要因でもあった。オシエツキーは「ドイツほど熱心に政治の手段としての戦争を信じているところはないし、戦争の恐ろしさに寛容で、その結果を軽視する傾向にあるところはない」[1]と述べている。平和主義者の批判は、ドイツの軍国主義を体現する国防軍に向かった。国防軍はヴェルサイユ条約により大幅に戦力を削減されていたものの、当時「国家の中の国家」といわれるほど社会的に大きな力を持っており、パウル・フォン・ヒンデンブルク（Paul von Hindenburg）ら軍人はヴァイマル共和国期になっても政治的影響力を有していた。実際、ヒンデンブルクはのちに大統領に就任するのである。またヴァ

イマル共和国初期の左右両翼の武装蜂起による内戦状態のなかでも、国防軍は存在感を示していた。当時国防軍はヴェルサイユ条約で徴兵制が禁止されたため、秘密裏に青年たちを集めて軍事訓練をさせていた。これは「闇の国防軍」（あるいは黒色国防軍）と呼ばれていたが、ここでは「フェーメ殺人」と呼ばれる秘密裏の粛清が横行していた。オシエツキーら平和主義者たちは、新聞や雑誌などでこのフェーメ殺人を暴露したほか、国防軍によるヴェルサイユ条約違反の再軍備の試みを繰り返し批判した。これに対して国防軍は平和主義者に対する言論弾圧を行い、右傾化した司法による不公平な裁判のもと、平和主義者たちは国家反逆罪や秘密漏洩罪で有罪判決を受けることもあった。

平和主義者の課題と目標は、軍国主義と戦争の無意味さ、そして野蛮さを人々に理解させることであった。彼らは戦争がいかに馬鹿馬鹿しいものであるか、名誉の戦死などないと繰り返し訴えた。トゥホルスキーは「兵士は殺人者」[2]とまで述べている。この「兵士は殺人者」という表現は物議を醸すものであったが、のちに第二次世界大戦後の西ドイツで再軍備と徴兵制に反対するスローガンとして用いられることとなる。一九二五年にエルンスト・フリードリヒ（Ernst Friedrich）によってベルリンに作られた「反戦博物館」も戦争の無意味さを伝えようとする取り組みのひとつであったと言えるだろう。

前年の一九二四年に『戦争に反対する戦争』と題する第一次世界大戦の写真集を出版したフリードリヒは、大戦の悲惨な写真を見せることで戦争が決して名誉なものではないという「真実」を示そうとしたのである。

(3) 平和のための意識改革

ドイツの軍国主義に対する批判と並んでヴァイマル共和国期の平和主義に顕著だったのが、平和のための意識改革の重要性の強調である。トゥホルスキーは「戦争を引き起こす真の原因」として「経済と、未だ啓蒙されていないまま扇動された大衆のぼんやりした精神状態」[3]を挙げているが、オシエツキーら平和主義者にとっては、平和運動は共和国という新しい政治の場で、生まれ変わった自主的・自律的な人間によって行われるべきものであった。オシエツキーは「軍事的な帝政の崩壊からうまれた共和国は、当然（帝政と）反対の傾向を目指すべきである。共和国はその存在の正しさを証明したいのであれば、過去と訣別しなければならないし、もし共和国が現在の政治状況をすべてその手におさめたいのであれば、平和主義的政策以外のものをすすめることはできない。（中略）ドイツの共和主義と平和思想はひとつのものである」[4]と述べている。そしてそれゆ

えに、平和運動はもはや一部のエリートの運動ではなく、大衆運動であるべきだと考えられた。第一次世界大戦以前の平和運動が国際協調の運動であり、「国家対国家」の争いである戦争をいかに調停するかを課題としたのに対して、ヴァイマル共和国期の平和運動はむしろ「個人が国家にどうかかわっていくか」という問題に取り組むようになった。こうした平和に対する考えの変化は、平和運動が扱うテーマの広がりにつながっていく。反戦あるいは非戦のアピールに加え、兵役義務、内戦、仲裁裁判、国際連盟といった第一次世界大戦以前から議論してきた議題だけでなく、犯罪一般、刑法、教科書、歴史教育などさまざまな主題へと議論が広がっていくのである。

ヴァイマル共和国期の平和主義と平和運動は、主としてカントの平和思想の影響と、倫理的に受け止められてヒューマニズム化された社会主義の影響を受けていると位置づけられている。彼らの一部には「革命的平和主義」を唱えるものもあったが、多くの場合求めたのは共和国のもとでの民主主義的な政治であり、法による平和と平和のための意識・精神改革であった。この点で平和運動は近代からのヨーロッパの啓蒙運動・解放運動の流れにあるものと考えられている。この場合、「平和」は「戦争の不在」にとどまらないものであり、「個人対国家」の問題として、あるいは個人の人権や生き方の問題と

して捉えられていったと言ってもよいであろう。

（4）次なる戦争を防ぐために

このようにヴァイマル共和国期には平和が「個人と国家」の問題に変わったと述べたが、本来の平和運動の課題である「戦争の不在」についても、平和主義者たちは多くの議論を行っている。

カントの影響を受けたドイツの平和主義者にとって、国際連盟の設立は第一次世界大戦以前からの大きな目標であった。アメリカ大統領ウィルソン（Woodrow Wilson）による提案が実現し、国際連盟が設立されたことは、いわばその夢をかなえるものであった。しかし現実に出来上がった国際連盟にはアメリカもソ連も参加せず、また敗戦国ドイツの参加も許されなかった。こうした状況を変えるべく、平和主義者たちは国際連盟の改良に尽力することになる。また第一次世界大戦での毒ガス戦の経験から、次に戦争が起きればそれは化学兵器戦になることが予測されたため、繰り返し毒ガス戦について警告がなされた。ただし一九四〇年代に入ると毒ガス以上の殺傷能力をもつ兵器が開発されることになるが、これについては一九三〇年代初頭までの平和主義者が想像することもな

かった。この意味では、第二次世界大戦は彼らの想像以上の被害をもたらすものとなったということである。また第一次世界大戦後の平和のための国際的な努力として知られているのが、戦争違法化を目指した不戦条約（ケロッグ＝ブリアン協定）であるが、これについてはヴァイマル共和国期の平和主義者は一定の評価をしながらも、実態が伴わないとして批判もしている。さらにドイツ外相シュトレーゼマン（Gustav Stresemann）とフランス外相ブリアン（Aristide Briand）によるロカルノ条約は、独仏協調の結果として評価もされているが、しかしロカルノ条約の背後にあるシュトレーゼマンの東部国境修正の野心を指摘し、これを鋭く批判もしている。

第一次世界大戦後に活発になったもののひとつが、ヨーロッパ統合運動である。オーストリア＝ハンガリー帝国の外交官を父にもち、日本人の青山光子を母に持つ東京生まれのリヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー（Richard N. Graf von Coudenhove-Kalergi）による「パンヨーロッパ運動」はよく知られている。ソ連のボルシェヴィズムを警戒する彼は、西ヨーロッパの連合こそがボルシェヴィズム化からヨーロッパを守るものだと考えた。カナダやオーストラリア、インドを始め世界各地に領土を持っていた大英帝国をひとつの地域とするなど、現在の欧州連合とは異なる点も多いが、クーデンホーフ＝

カレルギーの構想と運動は、その後のヨーロッパ統合論に大きな影響を与えた。左派の知識人を中心としたドイツの平和主義者も統合論を展開したが、彼らにとっては、クーデンホーフ＝カレルギーの運動はあまりに「貴族的」であり、大衆から離れたものであった。さらにソ連の敵視と排除に対しては批判的で、クーデンホーフ＝カレルギーがヨーロッパ各国の所有する植民地をそのままにしようとしたことについても不満を述べていた。また概してオシエツキーら平和主義者は、集団安全保障体制についてはしょせん別の形の軍事同盟に過ぎないといって懐疑的であった。ヨーロッパ統合が実現するのは第二次世界大戦後のことである。

（5）平和運動の「衰退」をめぐって

平和主義を唱えることが少なくとも「国家反逆罪」にはならず、むしろ「平和」の名のもとで軍事力が行使される傾向にある今日とは異なり、ヴァイマル共和国期の権威主義的かつ暴力的な社会においては、平和主義は歓迎されるものではなかった。すでに述べたように平和主義の主要な担い手は左派の知識人であり、彼らは「黄金の二〇年代」とも呼ばれたヴァイマル共和国期の文化の担い手でもあったが、その世界平和のビジョ

ンや国民国家からの解放という意識、そして国家の利益に対して人類の利益を優先させるという姿勢は、当時のドイツ社会では理解されることがなかった。根強い「匕首伝説」（「背後からの一突き伝説」）により、社会の不満は社会主義者やユダヤ人に向かったが、平和主義者もその「仲間」として多く迫害された。ヴァイマル共和国期には多くの政治家や著名人の暗殺事件が起こり、カール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルクが反革命右翼の将校によって暗殺されたほか、外相を務めたヴァルター・ラーテナウ（Walther Rathenau）や財務相を務めたマティアス・エルツベルガー（Matthias Erzberger）ら政治家たちが右翼のコンスル団に殺害されている。そして平和主義者であるハンス・パーシェ（Hans Paasche）も殺害され、またエミール・グンベル（Emil Gumbel）も襲われたのであった。こうした直接的な暴力の行使に加えて、国防軍や右派からの平和運動への妨害は目を引くものであった。不公平な裁判も多く行われた。元々保守的な司法が「共和主義者」あるいは「平和主義者」を蔑視していた。「平和主義者」はすなわち「国家反逆者」「非国民」「フランスのスパイ」などと見なされ、すでに述べたように有罪判決を受けることもあったのである。当時の左派の文化を代表する週刊誌であった『ヴェルトビューネ』誌の編集長をしていたオシエツキーは、実際に国家反逆罪で刑務所に入

れられている。左右両方からの暴力に慣らされ、「強いドイツ」を求めた当時の人々にとって、平和主義は軟弱で非現実的なものであった。一方、平和主義者にとって長い間敵は国防軍であり、ヒトラーは当初眼中になかった。左派の知識人にとってヒトラーはあまりに野蛮で、とても大衆の支持を得て政権を取れるような人物には見えなかった。平和運動がナチに対抗できなかった要因には、結果的に平和主義者たちがヒトラーの力を見誤ったことがあるとも指摘されている。

それと同時に、平和運動内部にも衰退の原因があったこともしばしば述べられるところである。ヴァイマル共和国期には自由主義者と社会主義者の運動がドイツ平和協会のような組織の中でひとつになったものの、結局は両者の間の溝が埋められず、内部分裂を生んだ。また社会主義者と共産主義者の対立は左派の力を弱めた。しばしば人間関係による内輪もめもあったため、平和主義者自身が運動に幻滅することもあった。さらに政党との関係も複雑で、社会民主党などは党に所属しながら平和運動に関わることを禁止していた。労働組合と平和団体が第一次世界大戦の記念日前後の反戦デモで競合して参加者を奪い合うことで、同じ方向を向く人々をまとめるのではなく、分裂させる結果となったともいわれている。また平和主義者による政党作りはあったものの、これは失

敗に終わった。平和主義を政策に掲げる政党が国政に進出するのは、一九八〇年代の緑の党の登場を待たねばならなかった。

このように平和運動内部の分裂と国防軍や右派からの弾圧により、すでに一九三〇年代に入るころにはドイツ国内の平和運動はほぼ機能不全になっていた。そして平和主義者の多くは生命の危機にさらされ、亡命せざるを得ない状況に追い込まれていた。一九三三年一月にヒトラーが政権をとると、国内に残っていたものは逮捕され、強制収容所に入れられるなどした。ナチの焚書により、彼らの書物は焼かれることとなった。亡命した平和主義者たちは各地で反ナチの抵抗運動を行うが、一九四五年を迎える前に多くの平和主義者たちが死亡した。クヴィッデは一九四一年に亡命先のジュネーブで病死し、トゥホルスキーは一九三五年にスウェーデンで自殺している。そしてオシエツキーは一九三三年二月末の国会議事堂炎上事件後すぐにナチによって捕らえられ、最終的にエスターヴェーゲンの強制収容所に入れられた。そこで彼は一九三五年度のノーベル平和賞を受賞するが、結核のため一九三八年に死亡した。他にもヴァイマル共和国期の平和主義者の多くが死亡したり、あるいは亡命先に残ったままでドイツに戻ることがなかったため、第二次世界大戦が終結したのち、ドイツの平和運動は再開に困難を極めること

となるのである。

おわりに

一九四五年以降、「平和運動」と「平和主義」は再びその意味を変えることとなる。戦後の平和運動では、広島・長崎への原爆投下の影響を受けて反核兵器の運動が主体になっていく。加えて西ドイツでは、五〇年代の議会外野党の運動や一九六八年の学生運動を経て、反原発運動、環境保護運動、フェミニズムなどとも連携しながら、八〇年代までに平和運動が草の根の運動となっていく。第二次世界大戦後、ファシズムの克服が西ヨーロッパのアイデンティティーになるなかで、西ドイツで「抵抗」や「不服従」といった概念が広まるが、平和運動はこれらを取り込みながらさらなるテーマの広がりを得ただけでなく、安全を脅かすものへの「抵抗」の運動へと変わっていくのである。

こうしたなかで冷戦下のイデオロギー対立の影響もあり、ヴァイマル共和国期の平和運動は西ドイツにおいてはあまりに「左派の運動」というイメージが強く、長い間評価されずにいた。一方、東ドイツでは、オシエツキーらに「共産主義の闘士」としてのイメージがつけられ、彼らは「平和の象徴」と見なされて高く評価されるが、ドイツ平和

協会のような「ブルジョア平和主義」は無視されるということが続いた。しかし本稿で振り返ったように、平和運動は一九世紀末から国際協調や調停および仲裁の運動として始まり、これが社会主義を取り込みながら個々人の国家との関係を問い、政治参加を求めるものに発展し、草の根の運動になっていったと考えられる。

このように考えると、一九四五年以降の草の根の反戦平和運動のイメージからのみ平和運動と平和の概念を捉えることはできない。少なくともヨーロッパの脈絡において「平和」あるいは「平和主義」という言葉を用いるとき、上述のような歴史的変化に着目する必要がある。「戦争の不在」あるいは「暴力の不在」に関する議論やクエーカーなどのキリスト教的な思想・信条による絶対的非暴力の思想に加え、ヨーロッパ近代の啓蒙思想や解放運動といった文化的背景も理解することが重要となるだろう。それによりヨーロッパ的な平和観と日本的な平和観との違いが明らかになり、ここから生じる議論のずれや、平和の概念をめぐって起こる文化的な衝突を避けることができるのではないだろうか。

本稿は主として筆者の以下の研究成果を、連続市民講座での講演およびブックレットの原稿用にまとめたうえで加筆修正したものである。

竹本真希子「カール・フォン・オシエツキーの平和主義」（『歴史学研究』第七八六号）、二〇〇四年三月。
竹本真希子「パンヨーロッパ運動と『ヴェルトビューネ』」（『専修史学』第三六号）、二〇〇四年三月。
竹本真希子「来るべき戦争への警告―ヴァイマル共和国時代の平和論から―」（『専修史学』第四〇号）、二〇〇六年三月。
竹本真希子「ヴァイマル共和国末期の平和運動の諸問題―オシエツキーと『ヴェルトビューネ』をめぐる裁判から―」（『専修史学』第四五号）、二〇〇八年一一月。
Makiko Takemoto, “Pacifism and Peace Movements in Germany during the First Half of the 20th Century”, in: Carol Rinnert/Omar Farouk/Yasuhiro Inoue (eds.), *Hiroshima & Peace*, Hiroshima 2010.
竹本真希子「ヴァイマル共和国期の急進的平和主義者にとっての軍縮と平和―『ヴェルトビューネ』の記事から」（『専修史学』第五六号）、二〇一四年三月。

主要参考文献

石田勇治『20世紀ドイツ史』白水社、二〇〇五年。
斉藤哲・八林秀一・鎗田英三（編）『20世紀ドイツの光と影』芦書房、二〇〇五年。

武田昌之「ヴァイマル期における平和主義」（『歴史学研究』第五五〇号）、一九八六年一月。
中井晶夫『ドイツ人とスイス人の戦争と平和―ミヒャエーリスとニッポルト―』南窓社、一九九五年。
西川正雄『第一次世界大戦と社会主義者たち』岩波書店、一九八九年。
エルンスト・フリードリッヒ（編）、坪井主税、ピーター・バン・デン・ダンジェン（訳編）『戦争に反対する戦争』龍溪書舎、一九八八年。
Donat, Helmut/Holl, Karl（Hrsg.）, *Die Friedensbewegung. Organisierter Pazifismus in Deutschland, Österreich und in der Schweiz*, Düsseldorf 1983.
Holl, Karl, *Pazifismus in Deutschland*, Frankfurt 1988.
Riesenberger, Dieter, *Geschichte der Friedensbewegung in Deutschland. Von den Anfängen bis 1933*, Göttingen 1985.

註

（1）Carl von Ossietzky, „Rechenschaft“, in: *Die Weltbühne*, 1932.5.10, S. 701.
（2）Ignaz Wrobel（=Kurt Tucholsky）, „Der bewachte Kriegsschauplatz“, in: *Die Weltbühne*, 1931.8.4, S. 192.
（3）Ignaz Wrobel（=Kurt Tucholsky）, „Über wirkungsvollen Pazifismus“, in: *Die*

Weltbühne, 1927.10.11, S. 555.

（4）　Carl von Ossietzky, „Die schwache Republik. Auch ein Jahresrückblick“, in: *Berliner Volkszeitung*, 1920.12.30（zitiert aus Carl von Ossietzky, *Sämtliche Schriften*. Hrsg. v. Gerhard Kraiker/Gunther Nickel/Renke Siems/Elke Suhr, 8 Bde., Reinbek bei Hamburg 1994, Bd. 1 [94], S. 289f）.